

# 浪江の

# こころ通信

・第80号・



平成23年3月11日に発生した東日本大震災、そして福島第一原子力発電所の事故により、町内全域に出されていた避難指示は、平成29年3月31日に「帰還困難区域」を除き解除されましたが、多くの浪江町民は福島県内外に分散避難をしています。長期化する避難生活、先の見えない不安の中で、町民の皆さんがどのような思いで生活し、ふるさとへの思いを抱いているのか。

こうした町民の思いをつなげるため一般社団法人東北圏地域づくりコンソーシアム(※)が中心となり、全国各地のNPO、大学等の皆さんが取材を進め、浪江町との連携のもと「浪江のこころ通信」が編集・発行されています。

この“浪江のこころプロジェクト”は、町民の皆さんの声を「浪江のこころ通信」を通してお届けし、ふるさと浪江町がかつての暮らしを取り戻すことへの願いとこだわりを発信・共有しようとするものです。

※一般社団法人東北圏地域づくりコンソーシアムは、東北圏(7県)の地域コミュニティ再生や協働のまちづくりの推進を目的として、大学、NPO、企業、経済団体、行政等が連携したコミュニティ支援ネットワーク。仙台が本拠地。

## お詫びと訂正

「浪江のこころ通信第79号(広報なみえ平成30年1月号掲載)」に誤りがありました。

心からお詫び申し上げます、次のとおり訂正いたします。

44頁 山田千鶴さん(権現堂)

- 写真説明部分2行目  
(誤)幼馴染の八橋久枝さん(正)幼馴染の八橋久江さん
- 写真説明部分3行目・4行目を削る

## 再取材シリーズ

### 再会・浪江のこころ

これまで取材を受けていただいた皆さんに、再度の取材を行うコーナーです。

3・11から6年以上が経過した今、感じていること、伝えたいこと、そして最初の取材以降の気持ちの変化やふるさとへの思いなど皆さんの声をお届けします。



「浪江のこころ通信／第80号」への感想をお寄せください。

【連絡先】〒979-1592

双葉郡浪江町大字幾世橋字六反田7-2

「浪江のこころ通信」宛

FAX.0240(34)4593



## 玉野 紘成さん(請戸)

取材者：認定非営利活動法人市民公益活動パートナーズ 古山  
取材日：11月22日

### いろんな経験をこれからの人生に活かしていきたい

震災当時、小学6年生だった玉野さんは今年、大学1年生になりました。東北福祉大学に決めた理由は、3.11の経験を活かして人の役に立てる資格を取りたいと、社会福祉士を目指して大学生活を過ごしています。第69号(平成29年3月号)に登場いただいた横山和佳奈さんとは請戸小学校の同級生。大震災と原発事故からの避難という大変な体験を礎に社会貢献を願う頼もしい若者にまた一人、出会うことができました。



▲「僕を見かけたら、また集まろうよ。連絡をください」とおっしゃっていました。

◆町内から南相馬市、福島市へ。さらに、県外へ避難  
卒業式を次の週に控えたあの震災の時は、ホームルームの時間で教室にいました。全員がまづ校庭に避難し、大平山に走って逃げました。山頂に待機していたのですが、しばらくして下に降りてみると、山の際まで波が来ていて移動できない状況になっていました。でも、じっとしていても仕方ないので役場を目指そうということになり、動き始めました。紙芝居『請戸小学校物語』でもよく知られていますが、いわき市の運送会社の方にトラックの荷台に乗せていただき、役場へ無事に避難し、先に避難していた母と祖母に会えました。

母は、「役場の4階から請戸が津波にのみ込まれるのを見た」  
◆友達も土地勘もなく、つらかった千葉での日々  
僕は千葉の中学校に入学しました。最初の頃は周りの人たちがうまく付き合っていたのですが、だんだん難しくなりました。同級生も先生もとても気を遣ってくれて、親切にしてくださったので

が、その気遣いが重たくて、申し訳なくて、負担が大きかったです。例えば、ある時、震度3くらいの地震が起こり、僕が卓球台の下に潜り込んだのを見て笑った同級生を、先生がきつく叱ったんです。似たような出来事が何度かありました。  
中学2年生の時、両親の仕事のことや学校のこともあり、相馬市に引越しました。浪江と同じ浜通りで土地柄も一緒だし、言葉のイントネーションも同じで、やっとなんか安心しました。近いうちに相馬市の山側に家が出来ます。海のそばで暮らしてきた僕たち家族ですが、母が「ここまで波は来ない」と言っていて決めました。  
僕は浪江町に戻るのには無理だろうと思っていますが、産業があつて学校が再開し、ライフラインや病院、サンプラザみたいなお店などが整備され、町としてきちんと機能するようになれば、帰る人は増えるのではないかなと思っています。

野球部の仲間を始め、友達と会う機会はあるのですが、まだ消息がわからない友人もいます。この記事を読んでくれた友人から連絡があるとうれしいです。



## 木幡 遥香さん(権現堂)

取材者：東北圏地域づくりコンソーシアム 竹内  
浪江町復興支援員宮城県駐在 村田  
取材日：11月12日

### 陸上・砲丸投げに打ち込んだ中学生生活 全国大会で思わぬ再会が



▲最後に出場した大会の様子

北海道東部、オホーツク海沿岸の斜里町ウトロ地区で暮らしている木幡さん。中学に入って本格的に始めた砲丸投げで全国大会に出場。そこで偶然、浪江の頃の知り合いと再会したお話をしてくださいました。

◆斜里での暮らし  
小学3年生の時にウトロに来て、地区の小中一貫校に通っています。小学生はみんな複式学級の小さい学校です。生徒数が少ないので、先生も生徒もみんなお互いに知っています。運動会や文化祭も小中一緒。運動会は保育所も一緒にやっていきます。  
家から学校までは2・5キロメートル程あります。急な坂道ばかりで、毎日そこを歩いているので、ウトロの子はみんな足が速く持久力があります。  
冬はスキーウェアに雪靴で登校しています。来た当初は寒さの程度が全く分からず、普通の長靴を履いたり、ベンチコートを着たりしていたのですが、とても寒くて耐えられませんでした。浪江の頃は冬も普通の靴を履いていたので、びっくりでした。  
朝は、家の雪かきから始まります。玄関の扉が凍ってしまうので、お湯をかけて氷を融かしながら開けます。雪や風がとても強い日は、

学校も休みになってしまいます。  
◆陸上競技に打ち込んだ中学生生活  
小学校の頃から陸上をやりたいと思っていたのですが、浪江にいた頃はまだ2年生で部活に入れませんでした。斜里に来てからすぐに少年野球チームに入り、陸上と野球をしている様子を見ていた陸上部の顧問の先生が、陸上部に入らないか、と勧誘してくれました。  
陸上部に入った頃は四種競技をしていたのですが、砲丸投げで全国大会に出た先輩がいたこともあり、途中から砲丸投げを専門にするようになりました。  
学校だと、平日、長くても2時間半しか練習できないので、毎週土曜日、網走の競技場まで1時間かけて通って練習していました。夏休みはほぼ毎日でしたので、母は送迎で大変だったと思います。投てきでも走る練習はします。投げる時に早く動くことが大事なので、短距離をすく走ったり、タイヤを付けたロープを腰に巻いて走ったり、さらに、それに重りをつけたり。冬は、雪が降って外では練習できないので、階段を走ったり、体育館で筋トレをしたり、室内用の砲丸を使って練習したりしています。  
◆全国大会で浪江の頃の知り合いと再会  
北海道内の大会で標準記録を超えることができたので、中学3年生の今年は、8月に熊本で開かれた全国大会に出場してきました



▲全国大会で愛沢誠也さんと偶然の再会

た。そこで、浪江の頃、幼稚園と小学校で一緒だった愛沢誠也君と偶然再会することができました。最初は、誠也君が全国大会に出ていることは知りませんでした。オホーツク地区から出場した知り合いが800mに出たのでその予選の結果をインターネットで見つけたら、たまたま彼の名前を見つけたのです。親同士も知り合いでしたので、連絡を取ってもらいました。こんな偶然あるのかとびっくりしました。震災後はお互いどこに住んでいるのかも分からず、すくく久しぶりでしたがお互い顔は覚えていました。お互いの親も再会を喜んでいました。  
その後、9月に北海道ジュニア陸上選手権に出て、陸上部は引退しました。大会に出ると北海道各地のいろんな先生から声を掛けられました。陸上がなければ、こういうつながりはなかったと思います。しばらくは、学校のテストが多いので勉強がメインになってきますが、それが終わったら、また練習を再開して、陸上を続けていきたいです。



## 畑中 武さん(中浜)

取材者：地域社会デザイン・ラボ 中島  
取材日：12月23日

### いろんなことがありましたが、 今はとても幸せです



▲ご自宅にて  
仲睦まじい武さんと奥様ご夫妻

第41号(平成26年11月号)に掲載された畑中さんは、86歳になられました。

津波で流された浪江のご自宅跡は堤防建設の用地となり、帰還できない状態に。また震災後は会津・東京で避難生活を送るなど苦労されましたが、現在はいわき市に建てた二世帯住宅で、奥様のヤイさん、息子さん夫婦、3人のお孫さんに囲まれ、元気にお過ごしです。

◆請戸小の広坂校長先生に感謝  
震災当日、うちの家族は7人のうち5人が間髪を容れず津波から逃れ、九死に一生を得たんです。私たち夫婦と息子のことは前にお話したので今回は省きますが、当時、請戸小学校に通っていた2人の孫は広坂校長先生のおかげで助かりました。「請戸の奇跡」と呼ばれているように、広坂先生がすぐに正しい判断をし、自ら生徒を背負って避難してくれたことで請戸小は全員が無事でした。

◆家族に支えられて  
私の方は震災後にぜんそくを患い、一時はちよつと歩いただけでも息が切れました。でも東京にいる娘が貴重な漢方薬を送ってくれたり、息子が青汁を買ってきてくれたり、家族みんなが気遣ってくれたおかげで回復しました。以前、前立腺がんを患ったこともあり、妻は食事にごく気を遣ってくれています。お米は3分づきの胚芽米、魚を毎日食べ、肉や野菜類をバランス良く。それから病後に良いと聞いて、野ブドウの実を35度の焼酎に漬けたものを朝晩杯1杯ぐらいたづつ飲んでいました。おかげさまで今年86歳の誕生日を迎えることができました。震災・津波で家も家財も全て無くしましたが、今はとても幸せです。大平山霊園にお墓も作ったことも安心感につながっています。

◆孫たちの成長と浪江の絆  
私は生まれも育ちも浪江で、船大工を生業にしておりました。自慢するわけじゃありませんが、

我ながらよく働いたし、行く先々の造船所で褒められ、腕には自信がありました。亡くなった父親が「よく働け。そして絶対に嘘をつくな」と、遺言みたいによく言っていたので、この言葉が体に染み付いているのかもしれない。私の子供たちも努力をいとわないところが一番の長所だと思います。孫たちにもそういう一面があるのか、三番目の孫は小・中・高と11年間、学校を無欠席。私が尋常小学校から中学校までの8年間無欠席だったという話をしたら、「孫は「おじいちゃんの記事を破る」と言っ、それを実行したんです。そういう孫たちの成長を見るのが楽しみです。

そして浪江の友人たちとも手紙のやり取りはずっと続いていて、心の支えになっています。私は時々、福島民報やNHKのラジオに原稿を投稿するんですが、「福島民報、見ましたよ」と連絡をいただくことも。「浪江のこころ通信」も皆さんの近況が分かるので、毎号とても楽しみにしています。これからは浪江の絆を大事にし、家族に感謝し、健康に気を付けて明るく過ごしたいと思っています。



## 渡部 友綱さん(末森)

取材者：認定非営利活動法人市民公益活動パートナーズ 古山  
取材日：12月11日

### 仕事で「ありがとう」と言われる時が、 一番うれしい

渡部さんは双葉地方広域市町村圏組合浪江消防署に勤務され、5年のキャリアを持つ消防士です。救急車で病人やけが人を病院に搬送することも多く、とてもやりがいのある仕事だとおっしゃいます。

震災の時は南相馬市原町区から山形県、福井県へと避難したため、浪江にいた頃の友達とはどうしても疎遠になってしまっているとか。この記事を通じて、そんな方々とのご縁が再びつながりますように。



▲国家資格である救急救命士を目指したいと将来の抱負を話してくださいました。

◆避難先の福井県で高校3学年に転入、進学  
東日本大震災が起きた日、僕は福井県立双葉高校の2年生でした。午後から野球部のバッティング練習を始めて間もなく、今までに経験したことのない大きな揺れに部員全員が地面に伏せました。その時は、逃げることも考えられませんでした。学校がすぐに避難所になり、近所の人たちや車椅子の方が集まってきました。津波警報が出たので先生の車で高台に避難することになり、僕たちも手伝いましたが、高齢者が多かったので何往復もしました。それから双葉中学校に避難しましたが、野球着のままだったので寒かったですね。両親が迎えに来てくれたのは、結構暗くなってからでした。家は地震の被害はほとんど無く、レトル

トカレーをストーブで温めて食べました。曾祖母と祖母、両親、妹2人の8人家族でしたが、国道114号の避難による渋滞を避けたことや、看護師をしている母の仕事の都合もあり、数日後に曾祖母と祖父母たちは親戚の所に、僕と妹たち、両親は南相馬市の母の実家に避難しました。1週間近くお世話になった後、山形県米沢市の体育館へ。何百人もの人たちが避難していました。毎朝散歩しながらガソリンスタンドの様子を見に行き、父に連絡をして車に給油をしました。

消防士になって一番強く印象に残った出来事は、平成29年4月末に浪江で発生した山火事です。12日間燃え続けて鎮火しましたが、双葉町と浪江町にまたがった消防車も入れないような悪条件の山中だったので、背負いバッグで山に登っては状況を確認しました。

◆小さい頃から憧れた消防士になるために  
高校卒業後、福井市内の専門学校に進学しました。震災前に怪我で救急車のお世話になった

双葉消防署浪江臨時庁舎には約30人が所属し、丸1日ごとの交替勤務。みんなでご飯を作ったり、筋トレなどをしたりしながら、いざという時に備えています。夜、パトロールをするのですが明かりも無く、震災以前とは全く違う景色に悲しくなる時もあります。町に必要なものは、まず総合病院。高齢者のために一番大事だと思えますし、町民の方々が一緒に楽しめる場所もできたらいいですね。